

薄暗い部屋だった。窓は厚いカーテンで塞がれていて、外の景色はわからない。革張りのソファは黒くて、デスクの上には書類が積まれている。煙草の煙が薄く漂っていて、鼻の奥がつんとした。

（どうしよう……このまま、どこかに売られちゃったりしたら……）

連れてこられたのは、体格のいい男がふたりだった。「来てもらおう」というたった一言と、腕を掴む力だけがあって、目的地もなにも言われなかった。マンションのエントランスから乗せられた車は、どこをどう走ったのかわからない。着いたのは古いビルの地下駐車場で、エレベーターで上がった先の、この部屋に通された。

闇金に手を出したのは半年前だ。

最初は十万円だった。

数ヶ月前に骨折で入院をしていた間、バイトができなかった。その間は貯金を崩して生活していたけれど、それも限界だった。どうしてもお金が必要だ

った。

返せると思っていた。返せるはずだった。でも気づいたら利息が雪だるまになっていて、元本が消えないまま数字だけが積み上がっていった。電話は一日に何度もかかってくるようになって、ある朝インターフォンで目が覚めた。

それが、今日だった。

「ここにいるやつです」

はっと、振り向いた。開かれた扉の先で、僕を連れてきた男が誰かに説明をしているようだった。

「そうか」

低い声だった。それだけで、部屋の空気が変わった気がした。

入ってきた男を見て、僕は思わず息を呑んだ。

背が高い。立ち姿だけで部屋が狭くなる、という感覚を初めて理解した。肩幅があって、スーツの下

にも体格のよさがわかる。首筋から腕にかけてタトゥーが入っているのが、シャツの袖口からわずかに見えた。

顔立ちは、彫りが深い。鼻筋が通っていて、口元は引き結んでいる。

(……うわ。俳優みたい……)

こんな状況なのに、最初にそうってしまった自分が信じられない。怖い、と思う前に、かっこいいと思ってしまった。

男は僕をちらりと見た。品定めでも値踏みでもない、ただ確認するような目だった。それがかえって落ち着かなくて、僕は視線を床に向けた。

「座れ」

男がソファを顎で示す。僕は言われた通りに腰を下ろした。革のシートが冷たかった。

男はデスクの椅子を引いて、向かい側に座る。書

類を一枚取り出して、テーブルに置いた。数字が見えた。僕の借金の、総額だった。

(……僕の、借金の全額だ)

わかっていた。だからここに連れてこられたのだ。それでも数字を目の当たりにすると、体の奥が冷えていく。

「今、全部払えるか」

男が言う。

「……は、払えません」

震えないように、なんとか僕は答えた。

「そうか」

男は書類を手にとって、もう一度見た。煙草を一

本取り出して火をつける。細い煙が天井へ向かって流れていく。その仕草が妙に落ち着いていて、心臓が音を立てるようだった。

沈黙があった。男はなにも言わなかった。ただ、見ている。その視線が重くて、僕はソファの革の感触を手のひらで確かめるようにぎゅっと握った。

「払えないか」

男が立ち上がって、こちらへ近づいてくる。一歩ごとに距離が縮まって、僕は思わずソファの背もたれに身を引いた。でも逃げ場はなかった。男が僕の真正面に立って、見下ろしてくる。

近くで見ると、余計に顔が整っていた。

そんなことを考えている場合ではないのに。

「金を返せないなら、お前の体で払ってもらおうか」

事実を読み上げるような声だった。怒鳴りもしない。ただ当然のことを言っている顔をしていた。

「調べたところ、カントボーイらしいな」

「そ、そんな……」

「嫌か？」

「……っ、嫌です……！ 僕は、そういうことは、」

「それが嫌なら、今ここで全額返せ」

「……っ！」

返す言葉が、なかった。

「俺の相手をしろ。それで帳消しにしてやる」

男がそれだけ言った。一瞬、意味がわからなかった。

わからなくて、でも次の瞬間にはわかって、頭に血が上った。

「……っ、それって」

「言葉通りだ。俺の相手をしろ」

「む、無理です……！ 僕、そんなこと……」

「お前の無理が通ると思うか？」

男は特に表情を変えなかった。怒っていない。ただ答えを待っている。その落ち着きが、かえって怖かった。

「選択肢は二つだ。今ここで全額返すか、俺の相手をするか」

「そんな、どっちも……っ」

「どっちも嫌なら帰っていい」

男がそう言った。

帰っていい。

(帰ったら、どうなる?)

頭の中で考えが回った。帰ったところで、借金は消えない。あの電話はまたかかってくる。インターフォンはまた鳴る。今日みたいにまた連れてこられる。それに今日はまだいい方かもしれない。次はもっとひどいことをされるかもしれない。

わかっていた。選択肢なんて、最初からなかった。

「……期間は、いつまでですか……」

自分の声が、思ったより落ち着いていた。男が少し目を細めた。

「借金が消えるまでだ」

「それって……いつ」

「お前次第だな」

（お前、次第……）

男が僕の顎に指をかけて、上を向かせる。強い力ではなかった。でも、逆らえなかった。

近い距離で目が合う。

整った顔が、ひどく間近にあった。目だけが、笑っていない。

「返事は」

低い声が落ちてくる。煙草の残り香がした。

「……わ、わかり、ました……」

「俺は凌一郎だ。覚えろ」

「りょういちろう、さん……」

「そうだ。じゃあ始めるぞ」

なにかを言う間もなかった。凌一郎さんは立ち上がりもせず、ただ手だけが伸びてきた。僕のシャツのボタンに指をかける。当然のことをする顔をしている。自然なことをしている顔で、指が動く。

(待って、心の準備が……！)

「……っ」

でも声が出なかった。出し方がわからなかった。
シャツの前を開かれて、凌一郎さんの視線が胸元に向いている。

「……脱げ」

命令というより、事実の告知みたいな言い方だっ

た。

「え……」

「聞こえなかったか」

繰り返しはしない、という空気だった。

僕は後ろを向いて、震える手でシャツを脱いだ。
凌一郎さんは手を出すわけでもなく、ただ待っていた。
上半身が剥き出しになる。

「立ってろ」

僕がソファから立ったまま動かずにいると、凌一郎さんはゆっくりと立ち上がって僕の周りを一周した。確認するような目だった。値踏みではなくて、もっと事務的な確認の目。それがかえって落ち着かなくて、僕は視線を床に向ける。

「……悪くないな」